

アクティブ・スクールへ

関係性を止揚する学校づくり

1 スマホ依存に立ち向かう

1. デジタル認知症

- 国立病院機構・久里浜医療センターのスマホ外来に 1000 名超が受診。大半が（親に連れられた）中高生。男子はゲーム依存、女子はネット依存。
- 「デジタルメディア導入先進国」韓国では全生徒の 12% がネット依存症。青少年の利用時間の法的規制実施中。「デジタル・デメンチア（デジタル認知症）」という用語はこの国で生まれた。
- 米国・ノースカロライナの公立学校 50 万人調査（5～8 年生）
「ノートパソコンの配布が学業成績の低下を招いた」
※デジタル・メディアは表面的な知の扱いは習熟させるが、知の処理水準の深さを低下させる。「ネット・サーフィン」との言葉通り。また、記憶の質も悪い。
- 「物忘れ外来」患者の若年化。20～30 代で相次ぐ「発症」
- WHO が疾病認定。「国際疾病分類」に盛り込む（8 月）ことに。

2. スマホ依存

- スマホ依存のメカニズムはアルコールやニコチン依存と同じ
ノー・コントロール（PFC 機能低下、発達疎外）、快感マヒ
- 情報量のオーバーフロー → 脳に吟味の時間なし → コントロールできず
→ 認知症状 → 長期化すると本物の鬱に
- 現れやすい症状
 - ① 二分化思考と二分化対応（白か黒か、敵か味方か）
 - ② ネガティブ言語（「でも～」とすぐ否定する）
 - ③ 被害的認知と攻撃性（自分を被害者とみなして他者を異常に攻撃する）
 - ④ 常同言語（何度も何度も同じことを繰り返し言う）
 - ⑤ 他者の視点がとれず、共感力がきわめて弱い
- 共感力は人間らしさの動力源。そこが危機に瀕している。

3. 打開への基本方向

- * リアルな共感・感動体験…非人間的なものへの違和感を感じる力を育てる
- * ゆるぎない基本的知識・教養（知性）…だまされない力の育成
- * 互恵的協働行動の体験…ものの見方と考え方（※）を育てる（※次ページ参照）

「ものの見方・考え方」

1. 認識の方法や観点を身につけている

- (1) 観点…観点と着眼点をもって対象（世界）を見る、表現する。
- (2) 比較…ある観点をもって比べることで物事の本質をつかむ
- (3) 普遍化…共通性に目をつけて一般化する
- (4) 順序…経過、展開、過程を見る
- (5) 因果関係…原因と結果の関係を見る
- (6) 相関関係…つながり関連を見て類推する
- (7) 分類…区別、区分、類別する
- (8) 条件…条件・仮定を見る
- (9) 構造…形態（構造）とつながり（関係）、その働き（機能）を見る
- (10) 変換…見方をひっくり返してみる、転換する、置き換えてみる
- (11) 選択…認識の観点や方法を選択する

2. 思考の手続きに熟達している

- (1) 演繹…前提された命題から経験に頼らず論理の規則に従って必然的な結論を導き出す思考の手続き
- (2) 帰納…個々の具体的事実から一般的な法則や命題を導き出すこと。
- (3) 類推…類似の点によってほかを推し量る。
- (4) 留保…割り切れないものは「ねかす」「あたためる」

3. 他者の視点を次々に想定し、吟味できる

- (1) 複眼的…自分の目と他人の目、内側の目と外側の目で見えて考える。(モニタリング)
- (2) 多面的…いろんな角度から見て、考える(cf.多角的)
- (3) 大局的…総合的、全体的な視座から見て、考える (cf.巨視的)
- (4) 概括的…細部にとらわれず、物事の内容を骨太にまとめて見て、考える
- (5) 系統的…つながりあったまとまりを見て、考える (cf.体系的)
- (6) 相補的…二者択一や白黒二元論ではなく、相対的に、関係性を見て、考える

4. 現実的にとらえる

- (1) 実践的…実際の物事に当てはめて見て、考える
- (2) 実証的…事実の観察や実験によって積極的にエビデンスを求めながら考える
- (3) 客観的…特定の個人的主観から独立して普遍性を追求しながら、考える

5. 変化をとらえる

- (1) 力動的…一面的、固定的、図式的に見ず、矛盾を孕み変化すると見て考える。
- (2) 象徴的…形象の奥に秘められた意味を考え、又はある形象に託して表現する。
- (3) 弁証法的…異質な又は矛盾するもの同士の止揚統合（アウフヘーベン）を考える

2 労働の質と量の改革

1. 教師は「聖職者」で「労働者」
2. 私学の不条理と誇り
3. 「働き方改革」と「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
4. 「1 週間の労働時間調査」結果から見える課題
 - ① 学級・学年指導の改革（質・量）
 - ② 部活動指導の改革（質・量）
 - ③ 「持ち時間基準」の改革
5. 働く者の積極性と生産性を高めるものは何か
 - ① Status (Social Position, Dignity)
 - ② Relatedness
 - ③ Fairness
 - ④ Opportunity (Chance) ※「生産性を最も阻害するものは職場の人間関係である」
6. 「働かないアリの意味がある」

3 科学的な指導へ進化するために

1. モチベーション二相
 - ① ドーパミン型 ※思春期に最大化
 - ② ノルアドレナリン型
2. 人間の脳は「つながり脳」
 - ① 「ダイヤモンド」論（志*仲間）の再確認
 - ② 司令塔・前頭前皮質（PFC: Prefrontal Cortex）※十代後半に最大化
思考と行動のコントロール
自己感（内側 PFC） 自制・視点取得（背外側 PFC）
やる気・思考・認知（腹外側 PFC）
3. 人として生きる力の源は何か
 - ① Social Capital (社会関係資本) … 帰属、つながり、承認
 - ② 自己開放 … 安心、安全、共感、感動
 - ③ 自己実現 … 社会的に意味のある確かな自己の存在

4 実践の焦点は互恵的協働集団へどう止揚するか

1. 「満足度」を分かちものは何か（「生徒アンケート」分析から）
 - (1) 第 1 因子は、向社会性（他者に心が開いている）、知性化・科学的思考の成熟度
 - (2) 第 2 因子は、自主活動・学園祭等への主体的参加の度合い
 - (3) 第 3 因子は、学びの快感（世界の広がり）

5 学びの改革—世界を広げてくれるところで人は幸せになれる—

1. 授業改革

学習は世界を広げる故に人間関係のプロセスに決定的に作用する。

- (1) 生徒を文字通り学びの主人公に
個としての学びだけでなく、学習集団を形成する当事者として能動的に行動する生徒を多数生み出す。
- (2) 学習集団づくり・・・学習を通じて関係性を止揚する
- (3) 看護科・普通科の研究授業や発表会への相互参加の促進

2. 優れた語り部を次々に

- (1) 臨地実習発表会と卒論発表会を探究学習と看護学習の相乗的発展の象徴として位置づけ、異化・連結プロジェクトを起動させる。
- (2) その際、全国の先進的実践や宝陵高校発表会及び完成度の高い宣誓式、文化祭オープニング、卒業式構成詩などの教訓を十分に踏まえる。
- (3) 以下について「語り部」育成強化事業と位置引き続き前進させる。
卒業式(構成詩)、文化祭MC、ボランティア活動報告など
- (4) これまでの改革をさらに前進させる。
弁論大会、学校見学会（コース紹介等）、探究プレゼンテーション

3. 多様な学びを評価、可視化、共有する

評価や寄り添いを見直しつつ、カリキュラムの互惠的立体的構造化を図る。

- (1) 引き続き、教科外活動を重視し、参加を促す
*すぐれた部活動、学級活動、生徒会活動、学校行事スタッフ活動、ボランティアなどを通じて、向社会性、論理的思考力、表現力、臨機応変の力など、学習の土台となる力を育てる。
- (2) 教科外活動を評価する
*実績や変化、成長を肯定的に評価できて足跡を記録できるポートフォリオ評価導入を検討する。(ルーブリック評価—かつての到達度評価の現代版—はパフォーマンス課題には効果的であるが、減点方式になりがちで意欲喚起の点で疑問が残る。)
- (3) 学習カルテとして保存するシステムの構築
*作文、レポート、作品、活動の様子などをファイルしたポートフォリオを、グループワーク・ミライムなどを活用して「学習カルテ」として保存し、教員間で共有できるようなシステムを構築する。

平成 30 年度方針

- (4) 課題(活動)の量を適正化し教科外活動と教科学習の双方を保証する。
- (5) 学級担任は、生徒の活動の全体像から、教科担当者及び教科外活動指導者とよく連携し、調整し、生徒を励まし、支える。

4. 学びと発信力の相補性

- (1) 卒業論文や「看護観」の冊子化、記録化と共有
- (2) 研究会、弁論大会、生徒集会、フォーラム、進学説明会等での質の高いプレゼン
- (3) 見学会でのプレゼン、宣誓式、学園祭、卒業式での構成詩チーム編成・準備・発表
- (4) 上記各企画の洗練されたスタッフ活動
- (5) タイムリーで見やすい(伝わりやすい) ホームページ記事掲載

おわりに

アクティブ・スクール(関係性を止揚する学校)へ
世界が広がるとは、自分たちが世界と新たにつながり直していくこと